

令和4年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 主催者賞受賞

# 子ども・若者真ん中の持続可能な地域作り

## 香川県小豆島町 一般社団法人小豆島子ども・若者支援機構



B&G 池田海洋クラブ様の海ゴミゼロイベント参加

「♪ハッピーバースデーディアAちゃん♪  
ハッピーバースデートゥーユー♪」  
「Aちゃん、さあ、ろうそくの火を消してね」  
「Aちゃん」10歳のお誕生会で、ケーキのろうそくの灯を消すシーンなのに、Aちゃんはじっとしている。みんなはそれをじっと見ている。被虐待児のAちゃんは、生まれたことのお祝いをもらった経験がないのだと気が付いた。誰かが「火をフウッとして、消すよ」と教えて、やっと、ろうそくの火が消された。ロウがケーキにいっぱい滴っていた。Aちゃんは、激しい虐待を受けて育った。いろんな症状を発症して地域の人がとても困っていた。子どものための施設からも「一人で来ないで」と言われたAちゃんは、その後、児童相談所や警察が介入し、地

域を離れなければいけなくなった。Aちゃん「ここで暮らしたい」との希望は叶えられなかった。たった一人の小さな子どもの「ここにいたい」という願いが叶えられなかったのは何故かとたくさん考えた。そして、「地域の誰もが排除されない居場所」の必要性に思い至り当会が生まれた。2018年の夏、正式に法人として出発した。夏生まれのAちゃんのお誕生会から1年後のことである。  
不登校の子どもの居場所として、また、地域の子ども・若者たちと一緒にご飯を作ったり、夏のビーチでキャンプや流し素麺をしたり、参加者の声を聴きながら活動を展開している。子ども時代に、笑顔溢れる楽しい思い出をできるだけたくさん経験してほしいと、地域のボランティアと一緒に活



動を重ねている。

2019年に、なんとか一軒家を借りることができ、児童養護施設で育ったBさん母子がその一軒家で夏休みを過ごした。地元の子や子どもたちとたくさん交流して、「怖い夢を見なくなった」との感想を残して元気に帰京した。以下は、滞在中のエピソードである。「死にたい」とよく発言する地元の小学生Cさんが居場所にやってきた時、BさんとCさ



「おでかけの居場所」での海水浴

んとCさんのお母さんで「死にたいと思うこと」談議が始まった。「この子、『死にたい』ってよく言うんですよ」とお母さんがBさんに相談するとBさんは「そう思うことあるよね。『死にたい』って思っているんだよ」とCさんに伝えた。その答えにCさんが目を丸くし話を真剣に聞き始めた。この地域で「死にたい」と呟けば、「そんなことを言っってはいけない。頑張っ」と言われることが多い。「死にたいって思っている」という発信は、Cさんにはとても新鮮だったに違いない。Bさんの話をじっと聴いていた彼女は、今では立派な中学生になって元気に学校に通っている。  
活動内容は、食費支援を伴った居場所の運営から、こども宅食・ワンストップ相談・送迎サポート等々、多岐に渡り、子ども版小規模多機能施設とも呼んでほしい程になった。  
そのような中、2020年3月、コロナ感染対策の一環として、学校の長期休校が決まった。その翌日、「お昼代がないっ！昼ごはんなしや！恨むんなら首相を恨め！」と、私の前で子どもを怒鳴りつけた困窮家庭のシングルマザーがいた。そのことをきっかけに、ごはんを無償で配り始めたところ、地域の協力が複数声を挙げてくれた。本当に子どもたちのために！と心ある人々が動き出し始めたのだ。



ある日の子ども食堂



こども宅食(お弁当配布)活動(約70食前後/週)



クリスマス会：サンタさんと一緒

この地には、立派な公教育は根づいているが、「児童福祉」という視点では、まだまだこれからでその伸び代は大きい。ただ、児童福祉という専門用語を使わなくても、助け合いや自助、お互い様としての協力関係が根付いてはいるものの、民間サポートには限界がある。また、自己責任論の下に「自助」が推奨され過ぎてきたがために、困窮家庭の子どもたちが置きざりにされ連鎖が繰り返されている。バスが2時間に1本ぐらいの交通空白地帯に住むひとり親のご家庭から、子どもを病院に連れて行ってほしいと頼まれ、夜に出勤したこともある。また、保護者が公的機関に

滞納金があると、子どもは、奨学金応募にエントリーする機会さえ与えられなかったり、通学費用のバスの補助金が止められる。「自分たちはマイナスからのスタートだ」とある若者がつぶやいた。

活動を重ねるにつれて、在宅中の若者や、協力者が集まり、活動がドンドンと広がっていった。乳児を抱えた困窮家庭から、2Lのお茶を箱買いして届けてほしいという要望から、弁護士とのオンライン相談や、発達に関する服薬の相談、また特別支援教育に関することまで、ありとあらゆるお悩みが届いている。2021年の活動はさらに増大し、交流関係回数が、約7000回に上った。お弁当一つを1回とカウントし、居場所への参加者や相談があれば、さらに1回のカウントとして累算した結果である。

それは、地域連携という、地域の皆様とのネットワークのおかげでもある。心ある関係者の皆様に支えられての活動だと感謝している。そして、子どもや若者たちが、毎日の生活の中で、肯定的な体験を積み重ねる重要性に気が付いた。参加した大人が、子どもや若者にたくさんの肯定的評価を伝える。家族以外

た。お弁当一つを1回とカウントし、居場所への参加者や相談があれば、さらに1回のカウントとして累算した結果である。



こども宅食（おひな様弁当）

の他者と交流し、自分が認められ「ありがとう。うれしいよ」と自己存在を尊重される体験を重ねることが、何にも増して子どもや若者たちを育てる。若ければ若いほど、その成長は目覚ましい。子ども時代にこそ、共感してもらえ自分は自分のままでいいと支持される体験が必要である。地域のみならず協力して、子どもたちと共に学び合いながら、大人も子どもも一緒に成長する場をこれからも継続して作り続けたい。そして、誰もが排除されない持続可能な地域環境を構築したい。

（一般社団法人小豆島子ども・若者支援機構

代表理事 岡 広美）